
IS - インフィニットストラトス - 機人(きじん)の力を持つ者

ナハト・リコリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニットストラトス - 機人きじんの力を持つ者

【Nコード】

N1699U

【作者名】

ナハト・リコリス

【あらすじ】

神の理不尽な理由で殺された人間が、ISの世界に転生する。その身に三人の女性と危険でもある力と共に。

この話は織斑一夏の双子の弟『織斑秋夜』とその中にいる三人の少女とその彼の持つ危険な力と、そしてその周りの者たちが織り成す物語。

そして彼らは神と悪魔の遊戯がこの世界に巻き起こした秋夜と対と

なる存在と戦い、そして大切な人の一生を過ごそうと頑張っ
て行く。

プロローグ（前書き）

すみませんでした。

色々作者の思うところがあり一度全部消して修正してみました。

プロローグ

「ふ・ざ・け・る・な〜!!」

周りが真っ白の何も無い空間で、俺は目の前にいる20くらいの男性に向かって叫んだ。

俺は最近やっていた仕事を止め、新しい仕事を探そうとハロー―クに行った。

運転免許を持っているが車を持っていない俺は、自転車で向かった後、仕事が見つからず、そのまま家に帰ろうといつもの道で帰っていたら突如落石がおきて俺は死んでしまった。

そしてこの場所に來たのだが、俺の目の前にいる神と名乗る男が俺におきた事故の顛末を話してくれた。

本人曰く、『暇潰しに付き合っしてほしいから』という理由で、俺は世界中の中から選ばれた人間で、しかもあの落石もそのためにおきたものらしいのだ。

そして俺は冒頭に至るのだが・・・。

「まあ、いいじゃないか。僕の暇潰しに付き合ってくれたら君が行きたい世界に転生させてあげるからさ」

「ふざけんな。さつさと俺を元の世界に返せ!! 神様だろうが何だろうが人の命で遊ぶな!!」

「無理だよ。君の身体は落石でぐちゃぐちゃ。おまけに君を元の世

界に送って、別の存在に生まれ変わらすことも出来ないって言う決まりがあるからねえ」

「な、なんだよそれ！それじゃ俺はお前の暇潰しに付き合わないといけないのか？」

「そ、だからさ、さっさと決めてくれないかい。特殊能力とかも色々付けてあげるからさ」

俺はそんなのに付き合い合わないと言うと、俺という魂を消滅させると脅された。どうゆう事かと聞くと、俺は新たに生まれ変わる事すら出来なくなるといわれたので、そんな事になりたくない俺は仕方なくこの神と呼ばれる存在の暇潰しに付き合うために、行って見たい世界を考えたのだが、5つも行きたい世界があるので決めるのが難しく、それで神に頼んでサイコロを作ってもらった。

ちなみに俺が行きたい世界は

- 1・リリカルなのはの世界
- 2・NARUTOの世界
- 3・バカとテストと召喚獣の世界
- 4・ゼロの使い魔の世界
- 5・遊戯王の世界

だったのだが、最後の一つはこの俺をここに呼び込んだ神に決めてもらうことにし、それだけ『当』と

描かれた面になり、他の面は俺の言った世界の名前が書かれているサイコロができた。

ちなみにだが、このサイコロには神が一切の手を加えないと言った品物であるため、必然的に俺の運によるものとなっている。

(わかりやすくいえばごきげん うのサイコロです)

「しかし、サイコロで君の行く世界を決めるなんて、君もおかしな人間だね」

「いいだろうが、それにこっちのほうが面白いし、神様であるあんたが選んだ世界ってのもあるからな。

それと確か特殊能力もこれで行く世界が決まってから言うから、それでいいな」

「ああいいよ。さて、そのサイコロを振ってもらおう。君が行く世界を」

そして俺はサイコロを投げて出た目は『当』の目だった。

「おめでとう、君が行く世界は『インフィニット・ストラトス』、通称『IS』の世界に決定したよ。よかったねえ」

神に良かったと言われたのだが、俺はその名前の作品を知らなかったので神に聞いたところ、本人も物凄く驚いていたが、簡単な説明をしてくれた。

神様曰く『ISと呼ばれる特殊なパワードスーツがあり、そこで巻き起こる学園アクションラブコメディ』らしいのだが、俺はパワードスーツといわれたので『特撮関係』のようなものかと思って聞い

てみたら違い、俺が好きだったゲームのキャラにその装甲を纏わせているみたいなものだとか教えてもらった。

それを聞いた俺は好きであったゲームシリーズのものを利用できるようにしてもらった。他のシリーズからの参戦も加えておき、一部の危険存在にはリミッターを付けてもらった。それとそのゲームシリーズでの存在を動かすために必要な能力や身体能力等を付加させてもらった。

同時に今まで女の子と付き合う事も一度も無かったので、最初に選んだゲームシリーズから三人を選んでおいた。彼女達はその世界でいつか出会い、そして俺の恋人になるかもしれない人物として選んだのだ。

そして俺は神にその世界に転生させてくれる前に、俺はその世界自身どのような話か知らないで、

神に頼んで今の名前と俺のこれまでの記憶の大部分を消してもらった。性格には『今の俺』というものを作り出した記憶で、転生してもうつすらであるが今の俺としての記憶を覚えているようにしてもらった。

そして俺はこの世界から消え、神に言われた転生先に生まれ変わっていった。

神が選ばれた人間に頼まれた能力等が書かれた書類のあるところが間違っ下下の部署に送付されてしまった。そしてそれをした神は『まあいいか』と思っただが、多少面白くないと思っただので彼が

選んでいない別の世界にいる『ある人間』の設定を選ばれた人間の設定に組み込んだ。そして選ばれた人間の一生を観察していった。

神の暇潰し、それは『選ばれて送り込んだ人間が起こすその世界での人生そのもの』なのだ。

人が『奇跡』等は呼ぶ現象があるが、実際は神々も悪魔達も一切『人界』に関して関与していない。

そしてそれがどのような世界であろうと神も悪魔もどのような理由であれ『その世界の住人全て』に関与はしない。

だが、彼らも何千年何万年も経つてくると毎日が詰らないのだ。何しろ彼等は滅多な事が無い限り『消滅』することすらなく、永久とわに行き続けられるのだ。

彼等は同じような日を毎日過ごし、そしてある事件が起きた。それは悪魔側が落とした『あるノート』から始まった。

その『ノート』を使用した人間の欲望と、そしてその人間自身もつた『ノート』を使用しての己の正義の行為』と言うものが、全ての始まりであった。そのノートを落とした悪魔は罰を受けたが、そしてそれは神々にある『遊び』を考えさせる事となった。

それがこの書類に書かれた存在の『人生』を遊びとしたものである。彼等は『規定とルール』を作り上げ、対象とした世界に対して一定値の『能力』を付加させた存在をその世界に送り込み、その存在の人生がどの様なものになるのか見届けるのだ。

もちろんただでは面白くないので、神は悪魔とある話をつけている。それは悪魔は神が選んだ存在に対する『好敵手』を選んでおく事。

そう、対象とされた世界に送り込む人間は『二人』なのだ。

そしてその対象とされた世界も『オリジナル』では無い世界で、才

リジナルとよく似た『パラレルワールド』の一つにこの二人を時が来たら合わせ、戦わせ、そしてその結果その世界がどのような『未来』に行きつくのかを、楽しんでいるのだ。

『破滅』でも『創造』でも、どちらでも良いのだ。『神』と『悪魔』が選んだ存在がその世界に起こす事態がどのような事を引き起こすのかは、まだ解らないが、それでも楽しい事になるであろう事は目に見えているのだ。

そして神が書類を下の部署に渡したと同時期、悪魔側も選ばれた存在を神が選んだ存在と同じ世界に送った。そして神と悪魔はその二人の存在の人生を見て行く。お互いに一切の干渉もせず、そしてその存在とその周りが引き起こしてゆくであろう、その選ばれた世界の未来を笑みを浮かべながら見続けるのだ。

第一話 始まりの学園生活。精神的に死にます

「(き、キツイ。まさかこれほどまでキツイとは)」

俺は兄である『織斑一夏』と一緒に『ある学園』に入学した。それもただの学園ではない。

何しろクラスメートは俺と兄である一夏を除けば、全員が『女子』なのだ。

女性副担任である山田麻耶先生がSHRの時間と言っているのだが、そんなものはこの周囲からの女子の女子の視線からすれば、何の価値も無いほど薄い。

「(頼む、誰でもいいから『変わってくれ』)」

俺は自分の中にいる三人の『女子』に話しかけ、兄である『織斑一夏』(俺は一兄と呼んでいる)は窓側にいる幼馴染で六年振りにあった『篠ノ之箒』に目を向けたが、すぐに顔をそらされてしまった。まあ、六年振りに再会した兄に対してあの態度は無いだろが、こちらにも精神的にキツイ。

ちなみにだが、この場合は席が悪いとしか言いようが無い。

何しろ俺達兄弟の席は中央の列で、しかも最前列で、一番前に兄である一夏がいて、その兄の後ろに弟である俺『織斑秋夜』はいるのだが、周りの視線がきつくて、副担任である先生の言葉なんて俺は何も聴いていないくらい精神的にまいっているのだ。

そして俺には家族と幼馴染しか知らない『特殊な秘密の存在』があるのだが、その存在は『三人』いて、その三人にこの状況を如何に

かしてもらおうとしたら、とんでもない返答がかえってきた。

《(嫌ですの)》 《(無理ですわ)》 《(う、ごめんなさい)》

「(な、何でだよ。頼むから今精神的に一番きついんだ。『精神』だけでもいいから変わってくれ)」

かえってきた返事は『拒否』だった。実際問題、この周りからの視線は物凄く痛い。

顔はあれなので周りから間違われやすいが、手には冷や汗がたつぷりについて、精神的に結構きついのだ。

そして俺の中にいる存在は全員が『女性』であるため、この状況下なら少しは大丈夫なのだろうが、ある事を言われて、はつきりした。それに気付かないほど俺の精神はきつかったのだ。

《(忘れてますの？私達が出してしまえば色々と面倒が起きますのよ)》

《(そうですね。例えば精神面だけとはいえ、後々面倒なことが起きるかもしれないわ)》

《(ええ、もしこの学園内で身体が『変化』してしまう可能性も無いわけじゃないですし)》

そう、俺の身体は変化してしまうのだ。何故かは解らないが、俺の中にいる三人の誰かが出てきたさい、俺の身体が変化し、三人の身体に変化するのだ。

しかも、知り合いである自称天才科学者が調べた所、彼女達は『人としての身体』を有している事が解り、結果的に俺は『一つの身体』

ではなく、『四つの身体』を持つ存在らしいのだ。
ちなみに、それを調べた天才科学者もこれ以上解らないので『お手上げ』らしいのだが。

そんなわけで俺は三人から話を切り上げると、『バアンツ！』と音がした。しかも音を発生させた存在が兄であり、そしてその音を鳴らさした存在は黒いスーツにタイトスカート、長身で物凄い位すらつとしたボディラインを持ったその人は俺達の良く知る人物だった。

「げえ、関羽」

そう言った瞬間一兄はその人が手に持っている出席簿でおもいつきり叩かれたが、俺に至っては思考が止まっている。それもそうだろう。何しろ職業不詳で家に帰ってくるのも月に1回か2回程度で、俺の持つ『スキル存在』すら打ち破る実姉じっし『織斑千冬』が何故ここにいるという考えで埋め尽くされている。ついでに言うと俺の中の三人も同様らしく、色々と何か言っているが聞こえない。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。出来ない者にはできるまで指導してやる」

そう千冬姉言った瞬間、周りから黄色い歓声が上がった。

「キャー　　！千冬様、本物の千冬様よ！」　　「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

と様々であるが、とうの姉本人は物凄い位嫌そうな顔とポーズをしていたのだが、そのポーズが余計に火種を呼んだのかとうとう『SかM』的な発言まで飛び出してきた。

こんな黄色い声を出しているクラスメートと共に一年間いなくてはいけない俺達兄弟はどうなんだろうなあと、変なことを考えていたら、千冬姉が俺達の方に顔を向けた。

「で？お前はまともなできんのか？それと織斑弟、お前も自己紹介しろ」

「いや、千冬姉、俺はー」 「まだ俺の順番じゃないよ千冬姉」

その瞬間一兄は多分ではあるが三回目、俺はこの学校に来て初の攻撃を食らった。そして姉の言った言葉は公私混同するなと言うものだったので納得は出来たが、叩くのはどうだろうかと思っただが、何かあれば叩かれそうなので了承した。

だが、このやりとりで俺達が姉弟である事がバレたが、なかには気楽にも『変わってほしい』とか言っている人もいる。

「それはそうと、織斑弟。お前もさっさと自己紹介しろ」

「わかりました織斑先生。俺はこの織斑一夏の弟で織斑秋夜と言います。兄の一夏共々これからよろしくお願いします。それと趣味は小物などの製作なので、製作費用さえくれれば何か作って差し上げますのでよろしくお願いします」

俺は千冬姉に叩かれたくないので、弟でなく生徒として自己紹介をしました。

趣味のことを言った瞬間周りから顔が原因かなと声が聞こえた。

実際この女顔が原因で中学時代に幼馴染の姉が来て、俺が寝ている間にとんでもない黒歴史を作られた事があり、あまり顔についてはいい思い出がない。そのために今まで何度泣いたことがあるやら。

そして俺達が兄弟がいる学園、それは公立『IS学園』である。

ISとは、通称『インフィニット・ストラトス』と呼ばれる宇宙空間での運用を想定したマルチフォーム・スーツ。

しかし『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、そしてそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた、つまり飛行パワードスーツだ。しかし、このISにはある致命的欠陥があった。それはこれを起動させることが出来るのは『女性』だけと言うもの。

そしてこのISが世界に出てきて今年で10年だが、世界情勢は激変した。

今まであった軍事バランスは崩壊し、戦車や飛行機、ミサイルに至るまでただの鉄くずとかし、ISを扱える女性が即ち国の防衛力になり、どの国も率先して女性優遇制度が出来たため、結果『女性』『偉い』と言う構図は瞬く間に浸透、結果的に今のこの世界は『女尊男卑社会』になってしまった。

そう、つまり『IS』とは本来なら『男性』が触っても何もおきもしない上に、何も出来ないマネキンと同じものだったのだ。

俺達と言う兄弟が現れるまでは。

そう、俺達兄弟は『世界で初めてISを動かせる二人の男子』として、このIS学園に入学したのだ。

人物設定（前書き）

人物設定です。

ほとんど前と変わりはありませんが、一部追加しています。

人物設定

織斑 秋夜（オリムラ アキヤ） 15歳
CV 小田 久史（わからない人はギャラクシーエンジェル？の力
ズヤ・シラナミ）

本作の主人公であると同時に神の都合によって殺された転生者の男性。

原作知識は一切持つておらず、簡単な説明を受けただけの存在。

原作主人公の織斑一夏とは二卵性双生児の弟であり、この世界でISを動かせる二番目の男。

多重人格者で、『アルフィミー・ブロウニング』・『シャイン・リクセント』・『水月楠葉』^{ミナツキクスハ} いう三人の女性人格を持つており、三人の内誰かが出てくる際には身体の容姿もそれに伴い変化する。ただし、意識のみの時もあり、その際には出ている本人の容姿のままで会話をしたりするときがある。

（漫画版Get Backersの出てきた弥勒一族を少し特殊にしたものだと思うてください）
また、三人の内誰が出ている時に元の秋夜の姿にも戻れる。

実際この三人は主人公が今まで（過去で）一切女性とのいい出会いが無かったので、神に頼んだ『恋人』のような存在だったのだが、神の手違いでこのようになった。

一応秋夜が主人格で、他の三人は副人格のようなものである。

ちなみにこの三人の存在を知っているのは家族の一夏と千冬、篠ノ之の家族全員とセカンド幼馴染である鈴である。

神から貰ったスキルは『機人変化^{きじんへんげ}』という、スパロボOGシリーズ、スパロボ シリーズのオリジナルと勇者シリーズ、ダイナミックシリーズ等の一部の機体を2.5m～10mサイズの鎧の様にする能力であるが、一部の機体（グランゾンやデイス・アストラナガン、真・ゲッターやマジンカイザー等）には制限時間や武装制限が設けてある。

（ただし鎧になる存在にも一部例外があり、サイズが違うときがある）

合体攻撃が出来る存在もあるので、一部の機体を召喚出来るようにしている。

（召喚できる存在は、自身が使う存在も含めて最大で12体までで、召喚した存在も2.5m～10mサイズである。こちらも同様に一部の機体に対してはサイズが違うときがある）

だが、一部の特殊関係機体の使用が出来ず、完全に全ての機体を出せるわけではない。同様に一部の機体を動かすために必要な能力は持っているが、一部はまだ使用できていない。

（例 ジェネシック・ガオガイガーやガオファイガーを動かすためには、エヴォリユダー化しないといけない等 e t e …）

此方の方は家族である千冬と一夏、そして束だけである。ただし束が知っているのはごく一部しか知らない。

この能力が発動したのは三人の人格を知った後で、中学1年の時に姉の出演していた第二回IS世界大会であるモンテ・グロツソのときに起きた誘拐事件が原因で、誘拐犯の一味に一夏が暴行され、その際頭から血を流していたので死亡したと勘違いし、その時の怒りの感情で初めて発現した。そして使用機体で誘拐犯の大半を行動不能（殺してはいない）にし、主犯格がISを使用し、戦闘になった

のだが途中で暴走し、暴走で主犯を逃がし、入れ違いで救助に来た千冬を敵と勘違いし殺しかけた。

（ちなみにこのとき千冬はISのもつ装着者の絶対防御が起動したので、気絶と数日の怪我ですんだが、ISは破損レベルが4よう状態であった）

その後一夏が気絶から回復して千冬の名前を言った瞬間、暴走状態から元に戻ったのだが、自分が姉を傷つけたと知ってまた能力が暴走し、元いた世界から行方をくらました。

暴走して行った世界で『ある10人』と、その10人を支援する人々のおかげで能力が安定する様になってきたが、当初は相当険悪であった。

安定してから、元の世界に戻り、家族である一夏と千冬に怒られたが、家族としてもらう事に喜びを感じた。

現状で使用できる機体の情報を出せるようになっていたので、結構重宝している。その情報を元にあるものをこの世界のネットに出している。

容姿はCVのキャラと同じカズヤ・シラナミと似ていて、そのため一夏よりも女顔に近い。

普段は温厚だが、家族や大切な人間などに対して何かするような存在には一切容赦はしない主義で、

怒るときは冷ややかに怒るので、結構怖い。

また兄である一夏の鈍感には手を焼いており、その度に後ろから兄が刺されるのが嫌なので、

相手の女性陣を何とか宥めたりしている苦勞人でもある。

同時に女顔が原因での黒歴史が存在しており、そのせいで今まで別の意味で苦勞もしています。

篠ノ之束が創りあげたISには一切の興味も何もわかないので、返答に至っては全て棒読みに近い。

趣味は家事全般と修行、服や小物の製作で、服等は生地と針と糸があれば数時間で完成させてしまうほどの腕前。後お菓子作り（洋菓子関係）が得意でもある。

好きなものは家族と、自分の作った料理やお菓子、服を着てくれた時に見せてくれる笑顔。そして向こうの世界貰ったお守り。それと向こうの世界で教わったある拳法の修行である。

嫌いなものは家族に害をなす存在達と篠ノ之束の迷惑行動。黒歴史をばらされる事である。

スキルでは『アルトアイゼン』や『R-1』、『サイバスター』等をよく使用している。

アルフィミー・ブrouニング 15歳

CV 水谷 優子

容姿と性格等はスパロボOG外伝に出てきた『アルフィミー』と同じだが少し胸がある。

趣味は兄である一夏をからかう事で、そのため毎度毎度一夏をからかっては遊んでいる。

所有しているIS等はないが、スキルにある『ペルゼイン・リヒカイト』を一番使用し、千冬がドイツ在住の際にはこれを利用してドイツ軍に無断侵入して行つては、荷物等の届け物を持っていったりした。

シャイン・リクセント

15歳

CV 水樹 奈々

容姿と性格等はスパロボOG外伝に出てきた『シャイン・ハウゼン』と同じで予知能力者でもある。

アルフィミーと同様に胸が少しあるがアルフィミーよりかは大きい。礼儀作法等を重んじる節があり、茶道等で長時間正座をしても大丈夫である。

それと同時に織斑家で一番怒らせてはいけない人物で、その恐ろしさは姉である千冬すら恐怖する。

また、金銭等の管理も彼女がしており、織斑家の中で一番の存在に座っている。

趣味は紅茶を嗜んだり、読書に神社でする神楽舞等の舞踊。

神楽舞は篠ノ之神社の夏祭りなどでよく踊り、そのため巫女服なども何度か着ている。

こちらも所有するISは無いが、スキルにある『フェアリオン』や『アステリオン』をよく使用している。

ミナツキクスハ
水月楠葉

15歳

CV 高橋 美佳子

容姿と性格はスパロボOG外伝に出てきた『クスハ・ミズハ』と同じで人格の中で一番胸が大きい。

性格は心優しく争いを嫌う性格だが、一度怒らすとその気迫だけで姉である千冬すら驚かす存在である。

実質の織斑家のNo.3に存在に座っている

大の健康オタクでもあり、織斑家には少しであるが健康関係のグッズが置かれている。

本人は他にも買いたい物があるらしいのだが、姉の千冬とシャインらに止められている。

趣味は読書と、本人が作る特性健康ジュース（通称特性クス八汁）の作成。

だが、この特性クス八汁はスポロボの方と同じで本人に自覚は無いのだが、効能は物凄い位高いのだが、物凄く不味く、飲んだ瞬間大半の人間は気絶させ恐れられている。

現在彼女の周りでこれを飲んで気絶していないのは姉の千冬と主人格の秋夜、そして天才の束だけである。

こちらも所有するISは無いが、スキルの『グルンガストシリーズ（零式を除く）』と『超機人』を良く扱う。

それと作者は胸のサイズとかが余り解らないので、IS関係の人間で表すと

クス八と篠ノ之箒が同じくらいで、シャインとアルフィミイはシャルロットと同じ位で、シャインの方が少し大きい程度です。

難しいかもしれませんが、ご了承ください。

人物設定（後書き）

作者はPSS3を持っていませんが、そのうち買って第2次OGを買いたいと思っていますので、変更しました。

それと秋夜の黒歴史ですが、GA?をやっている人はわかるものです。

ヒントはGA?でカズヤが誰も恋人にしない場合のあれです。

第二話 学園に入った理由。時を巻き戻したい

何故俺達兄弟が今まで女性のみで構成されていた『IS学園』に入学したのか、それは今から一カ月前に俺達兄弟がISに触れてISを起動させてしまったことが原因なのだ。

俺と、そして多分であるが兄も同じ気持ちであろう。もしも時間が巻き戻せたらと思う思いは。

一カ月前

二月の真ん中くらいの時期、俺と兄である一夏は中学三年生で、高校受験のまっただ中であつた。

昨年起きたカンニング事件のせいで、各学校に入試会場を二日前に通知するようになると言う政府からのお達しで、無茶苦茶であるものの、この当時はただの中学三年生であつた俺達兄弟は政府に文句を言いたい、そんな事は実際問題できないので、愚痴を言いながら試験会場まで急いで行つていた。

俺達兄弟が受けようと思つている場所は、自宅から近く・学力真ん中・学園祭は毎年有ると言う『私立藍越学園』である。

そして一番に理由はこの学園の学費の安さである。私立にもかかわらずこの学園の学費は物凄いくらい安いのだ。

なぜ物凄いくらい安いかと言うと、この学園の卒業生の進路の9割が、学校法人の関係企業に就職するからである。

一時期の就職氷河期と呼ばれた時代ではないにせよ、卒業後の進路までケアしてくれるというのはありがたい。

しかも優良企業が多いのがまたよく、そして地域密着型なので何かの理由で僻地に飛ばされる心配すらないのだ。

「いつまでも千冬姉に世話になってるわけにはいかないからな」

「そうだね。千冬姉に今まで世話になってるから、ちゃんとした仕事について安心させたいしね」

うちはちょっとした事情で両親がいない。そのため年の離れた姉が今まで俺達二人を養ってくれているが、正直な所、長年そのことには引き目を感じていた。

特に俺は『三人もの特殊な女性存在』を持っているので、俺が一番姉に悪いと思ってもいる。

幸い、千冬姉の稼ぎがいいから貧乏ではなかったけれど、それがまた無理をさせているようで心苦しい。

それは三人も同じで、姉の負担を少しでも減らせるようにと言う事で色々と家のことを手伝ってくれている。

結果的に三人の中で一番のしっぴかり者が家の金銭を管理してくれているが、それでもやはり心苦しいのだ。

実際俺も一兄も、中学を卒業したらすぐに働こうと思っていたのだが、姉の力ー腕力と高い戦闘能力ーには誰も勝てず、現在受験生というわけなのだ。

しかし、この学園に受ければ就職したも同じ。千冬姉に楽をさせてやれる、まあ本人が楽をしたいかどうかではなく、俺達がかしたいからするのだが。

俺達は俺の中にいる三人による協力と、そして一年間の猛勉強のおかげもあって模試での判定はA。
普通に受ければ普通に受かるはずなので、俺達はたいした緊張もなく会場に入ったのだが……。

「一兄、試験会場って何処なんだ？」 「俺も見当がつかないぞ。しかし、迷路みたいだなここは」

そう、中学三年生にもなって試験会場で迷子になってしまったのだ。仕方が無いだろう。何しろこの試験会場に選ばれた場所は広い上に道標も無ければ、自分達が今何処にいるかわかるように説明してある総合案内板すらないのだ。
完全に言って初めて中に入る人間に対しての配慮がなされていないのだから、迷子になっても仕方ないだろう。

結果俺達は近くにあったドアの先にいると思う人に道を聞くことにした。

そしてこのドアと、その後にとった俺達の行動が、あのような自体を引き起こすとはこの時は思いもしなかった。

「あゝ、君達、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押しているから急いでね。ここ、四時までしか借りれないからやりにくいたらないわ。まったく、何考えて……」

部屋に入った途端、神経質そうな三十代位の女性教師に言われた。どうも相当忙しいのか、その忙しさを判断能力が鈍っていたらしく、俺達の顔を見ずにぱつぱつと指示をただけで出て行った。

俺達は言われた事に不思議に思いながら近くにあったカーテンを開けると奇妙な物体が鎮座していた。

なんというか、『お城に飾ってある中世の鎧』だ。しかも忠誠を誓う騎士のようにひざまずいている。

敵密には甲冑とは違うが、たぶん人によっては鎧と言う印象は受けないであろうが、それに似た印象の『何か』が置いてあった。人型に近いカタチをしたそれは、使用される時をただ黙って待っているようでもあった。

「秋夜、これって『IS』だよな？」 「そうだけど、何でこんな所にあるんだ？」

それは『IS』だった。『女性』にしか反応せず、そして『現状最強の兵器』でもある存在。

まあ俺の中にある『スキル存在達』からすれば『IS』は下っ端の兵器なうえ、このスキル存在達に恐怖していた俺に『力の意味を教えてください』あの人達』からすればISは千冬姉クラスの人間が使用していない限り相当弱いものかもしれないのだが、この世界の現状で一番恐ろしい性能なのは誰もが知っている事実であるが…。

だが、このスキル存在達に勝つ千冬姉は物凄いくらい恐ろしく怖いのだが、同時に俺に意味を教えてください』人達も相当強いので、俺自身スキル存在が弱いとは言わないが、結構俺の知っている範囲の周囲には結構な猛者が多いと思う。

そして俺の中にいる三人の中の一人であるクス八から言われた事をそのまま一兄に話した。

それは俺自身ももしかすると、と言うものだったからだ。

「一兄、クス八が試験会場を間違えたんじゃないかって。二つとも名前が似てるから」

「・・・あるな。『アイエツ藍越』と『アイエスIS』で、どちらも学園だからな」

少し間があったが一兄も納得してしまい、どうしようかと思ったのだが、間違いであろうとなんであるうと、目の前に『IS』が置かれてあるのだ。どうせ『男性』の俺達が触っても何も起きるはずが無い。

そう思っただけに触っていく程度ならいいだろうと思ひ、一兄も了承した。

俺は中にいる三人に出てこないように言い、その自身が持つ『スキル』とのリンクも一時的に切断して俺と一兄はそこに有ったISに『触れた』

その瞬間、俺達の意識にISのもつおびただしいほどの情報の数々。数秒前には知りもしなかった『IS』の基本動作、操縦方法、性能特性、現在の装備、可能な活動時間e t e . . .

まるで長年熟知したもののよう、修練した技術のよう、すべてが理解、把握できる。

そして動くのだ。『IS』が。それも自分の手足のよう。

知りもしない、習ったことすらないのに、わかる。俺も、そして一兄も。

そして俺達はそれを教師たちに見つかり、そして教師達も本来ならありえない現状に目を疑っていた。

そして俺達はマスコミや政府関係者だなんだに、引つ張りだこにされた拳句、この『IS学園』に入学させられたのだ。

ちなみにだがこの事を知った千冬姉からは相当呆れられたものの、IS学園の服を用意してくれただけでしたたののかも知れない。

第二話 学園に入った理由。時を巻き戻したい（後書き）

秋夜に力を教えてくれた人達ですが、二巻のシャルの女の子暴露の時に外伝として出そうと思います。この時には篇も出して、三巻での一夏の大怪我・進化フラグの内容変更します。

ヒントとして、未だに人気のある作品の英雄達で、漫画の話を元とします。

ちなみ私は9番目と最強といわれている11番目とその前話が好きですね、昔では。

最近のでは初代と3番目と5番目と6番目と7番目と11番目の話が好きですね。映画版はまあまあ好きですが。

第三話 再会の幼馴染。それよりもこの状況をどうにかしてくれ！！

一時間目のIS基礎議論の授業が終わって今は休み時間だが、それでもこの学園の雰囲気はというと、

仕方が無いが、今の今までISは『女性』しか扱えなかったのでクラスメートというよりも、学園全体が女性で、しかも俺達兄弟は世界的にニユース等で取り上げられたので、当然学園関係者から在校生まで俺達兄弟の事を知っている。

その結果か、この休み時間中の廊下には他クラスの生徒に2・3年生がこちらを見たりしているが、今まで女性のための学園だったために、男性が存在している空気に慣れていないのである。

クラスメートの女子も、そして外にいる人達も『あんた話しかけに行きなさいよ』とか『あんたまさか抜け駆けするつもり』等の感じの雰囲気は俺達でも感じられるくらいのもなのだ。

ちなみにだが、IS学園は世界に一つしかないのだが、それでもここに入学するための事前授業として

IS学習を組み入れている学校も多いのだが、そちらも100%女子校なので、このIS学園にいる女子は全て男性に対しての免疫と言うものは無いので、もしも代表候補、軍やIS関係の仕事に彼女達が就職できない場合、一部の男性からすればこの学園の女子生徒はまさに『カモがネギ背負って歩いている状態』というよりも、『カモがネギと豆腐に鍋まで背負って歩いている状態』と言うのが近いかもしれない。

簡単に言えば超がつく箱入りのお嬢様みたいな感じが多いので、もしも就職ができない生徒は、人生真つ逆さま何って事もありえると思うのだが、学園としてその方面はどうだろうと思ってしまう。

しかしだ、この状況を如何にかして欲しいと思う。

仕方が無いという仕方がないが、俺達兄弟はこの学園の教師兼元日本代表で全国と言うよりも世界の憧れである織斑千冬の弟達と言うプロフィールまでつくると、ますます話しかけられない。

それとこれは自己分析では有るが、今まで兄である一兄のほう色々（本人は気付かなかったが）と女性にもてていたの対し、俺は周りで気に入らないことがある、小学校の頃から同級生だろうと先輩だろうと他校の生徒だろうと、毎日が喧嘩沙汰になるほどで、結果大小構わず事件を起こして暴れていたせいで恐れられ、中学に入っても同様に、結果一部を除いて周りに恐れられていた。

さらには今の世界の状況でうつとしい女教師もいたのだが、そちらは我が姉が教育委員会に先生達の協会に手が回り、その先生は首になり、しかも噂によれば何処の学校も採用されないように破門状態で廻ったらしい。

おまけに、一兄の超鈍感のおかげで女子のケアまでしていたので心労が絶えなかつたのだ。

まあ、一兄は一切と言っていていいほど女子生徒の行為に気付かず、いつ後から刺さられやしなやかとびくびくしていたものだ。

まあそれとは別に俺の場合女子からは嫌われていた。この女顔が原因で色々といやな思いでも多々ある。

それとは別でこの顔のおかげで小学校・中学校ともに急に束さんが家に現れては俺に対しての新しい黒歴史を生産しにくるし、学校の俺の下駄箱の中に嫌な物が入っているのは日常茶飯事で、幼馴染で国に帰った二番目の幼馴染である『あの子』にまでこの黒歴史のことで何度苛められた事か。

しかも最近では俺達がこのIS学園に入るとなった時に急に東さんが現れて俺の黒歴史に新しい物が加えられたのは今でも覚えている。とゆうよりもその時の俺の姿を見た一兄と千冬姉の顔を思い出すだけでも嫌なのだ。

過去の思い出を思い出すのはここまでにしておいておくとして、誰でもいいからこの状況を如何にかしてくれ。

「・・・ちよつといいか」 「え（へ）？」

突然、俺と一兄に話しかける女子が現れたのだが、周りのざわめきを考えると声をかけた人の勝手に行動したようなのだが・・・。

「「簾（ほう姉）？」」 「・・・」

目の前にいたのは6年ぶりにこの学園で再会した、俺達兄弟の幼馴染である篠ノ之簾しののほうだった。

ちなみに俺が彼女を『ほう姉』と言うのは、一兄と俺の中の三人との彼女の言い方を区別をするためであり、それ以外は何も無い。

当時の僕ら兄弟が通っていた剣道場の娘で、昔と同じポニーテールで、その黒い髪を結ったりポンは白であった。

彼女の家である篠ノ之家は『篠ノ之神社』と『篠ノ之道場』を兼任しているので、リボンの色が白なのはそのせいでもあるのだろう。

そして俺達兄弟が持つ篠ノ之簾の印象はというと『日本刀』を思わせる雰囲気だったのだが、6年の歳月を経てさらにその印象が高まっていた。それともう一つ、俺と運が悪ければ千冬姉も知っている一兄に恋した最初の人物でもある。

それと中にあるアルフィミィとシャインが、ほう姉の胸がクス八並

だったのでそれを悲願で泣いていたりするのだが……。

「廊下でいいか？」

この状況を抜け出せるのなら何でもいいのだが、多分用があるのは一兄だけであろうが、この際なので俺も便乗しておいた。

そして廊下に出ると、廊下にいた女子はまるでモーゼの海渡りのように道を開けたので、なんだろうなあと思ってしまうた。

それでも今話題の俺達兄弟と話をする女子生徒となれば、どのような会話になるのかと四メートル位離れて包囲網が出来てしまい、さらには周りが聞き耳を立てているのが物凄いくらい俺たちですら解ってしまう。これでは教室でも同じだったんじゃないかと思ってしまうた。

「そっいえば」「何だ？」

そうやって一兄が話を切り出したのだが、ほう姉から廊下に出ようと言ってきたので、ほう姉から話にかけるのかと思っていたが、ほう姉の昔からの日本刀の様な雰囲気を感じと、相手が一兄であると言う事で話が出来なかったんだろうなと思ひ、俺に関しては余り発言しないようにしていた。そのためこの状況を勝手に打破できる一兄に一存していたのだ。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」「そうだね。ほう姉、おめでとう」「……………」

俺と一兄は褒めたので、ほう姉は口をへの字にして顔を赤らめた。俺のほうは一兄が知っているので照れているのであるが、一兄は何で怒ってるんだらうと勘違いしているだろう。

昔からほう姉は一兄に対して自分の感情を表すのが昔から下手だっ

たなあと、俺は思い出していた。

「なんでそんな事を知ってるんだ」 「なんでって、新聞でみたし……」 「な、なんで新聞なんかみてるんだっ」

相変わらずのほう姉の感じに俺はそれを呆れた感じで見ていた。俺も新聞を見ているが、就職等で今の世界情勢だとか面接官に聞かれるだろうと思いい、新聞等を見て知らなければいけないので見ているだけだ。

それとほう姉の記事を見つけたのは一兄で、俺はそれを教えてもらったので良く覚えていた。

そして一兄はほう姉にすぐに気付いたと言った時にほう姉も喜んでいたのだが、その後の言葉で物凄い位怒っていた。

まあ当たり前の話だが『幼馴染のことくらい』って、ほう姉もただ一兄に関しては同情してあげる。

それとほう姉の次に幼馴染になった『あの子』にも言える事なのだが、一兄は知っててやっているんじゃないのかと思う時が多いので、本当にいい加減しないと後から刺されるか、ここがIS学園なのでISの訓練中の事故に見せかけて一兄は殺されるんじゃないかと、こちらの心労が何倍にも膨れ上がっているのだ。

頼むから一兄、俺の身体を心身ともに壊すような事は出来るだけ避けて欲しいのだが、無理な注文だろうなと思った。

そして休み時間の終了のチャイムがなった瞬間、廊下にいた面々は自分達の教室に帰って行った。IS学園の生徒らしく物凄い機敏だったのだが、俺達兄弟は席についていなかったので姉兼この学園の教師である織斑先生に出席簿の重い一撃を食らった。

第四話 怒りの鉄拳制裁と、今の世界で生きているくそ女登場

授業が二時間目にはいったのだが、一兄の様子を見る限り完全に内容の理解が出来ていないらしいのだが、それは俺のほうはしっかりとあの分厚い電話帳並の本をよく読んでいたので内容は分かるが、それに対しての理解となると少し違うので仕方ない。

だが何で一兄は内容が分からないんだ？俺と同じように貰ったはずなのに？

一兄は隣の女子がノートをとっているのを見て唾然とするしかないのだが、一兄は注視しすぎたために

その子に気付かれたせいで、本人は何とも無いような感じにはしたが、ほう姉が一兄に対しての目付きがさらに険しくなった。

そして山田先生も一兄の態度でもしかしてわからないのだろうと思つて話しかけたら、一兄の『ほとんど全部わかりません』と言つたので唾然とし、そして周りのクラスメートに『わからないって人は』つて聞いたら一兄除く以外誰も手を上げなかった。

「お、俺だけ分からないの？」 「一兄、貰った参考書はどうしたの？」

俺はもしかしてと思つたのだが、もしもそうならこの馬鹿兄貴の頭をどうにかしようと思つた。

「いや、実は古い電話帳と間違えて捨てた」 ドコツ！ バコツ！

馬鹿兄貴がそう言った瞬間、千冬姉の出席簿による頭部攻撃と俺の拳が馬鹿兄貴の腹部に直撃した。

周りの人間は俺が自分の兄に対しての行動に驚いていたがそんなの

知った事ではない。
馬鹿兄貴が頭と腹をやられて痛がっているがそんなものは今の俺に
対しては無意味だ。

「この馬鹿兄貴、ちゃんと必読って書いてあつただろ。捨てたんなら俺に借りるなり何なりしろよな。それに忘れてるのか？」

「な、何を？」 (ブチ!) もう一回同じこといったら今度はこの場でフランケン使うよ」

「い、いや本気でわかんないから」

俺は千冬姉に顔を向け、この馬鹿に対しての有言を実行しようと思つたのだが千冬姉がやるなと顔で制したので、止めた。

「馬鹿かお前は？ ISはスポーツの道具ではなく人殺しになる道具だ。その意味が分からないのか、お前は？」

「そつだよ。どんな理由だろうとISに使われている武装は人の命を簡単に奪える武装ばかり。だからルールがあつて使用もちゃんと制限されてる。けれどISを扱えると言う事は訓練でも死者が出るかもしれないんだから、基本的なものくらい守れ！」

「わ、悪かつ 悪かつたで死者や怪我人が出たら警察とか要らないよ『うっ』」

「まあいい。織斑弟、後でこの馬鹿用に再発行してもらつから一週間で覚えさせる」

「い、いや千冬』わかりました。ですが鬱憤晴らして5日で覚えさ

せますね』って、おい!!」

「何、文句ある?(ニコツ)」

「(ゾクツ)わ、わかった。何とかして5日間で覚えます」

俺の笑みでこの馬鹿兄貴は納得した。正式には無理やり納得させた。ちなみにだが、さっきの俺の笑みを見た大半の人間が恐怖していたが、関係無い。

ISは『兵器』であると言う事を忘れていた馬鹿兄貴には丁度良い制裁なのだから。

その後山田先生が馬鹿兄貴に放課後特別に教えてくれるようになったのだが、ある意味とんでもない妄想を起こしていたので、千冬姉が咳払いをして現実に戻ったのだが、本当にこの先生は大丈夫なのかと思ってしまった。

この時間だけ考えても果てしないほど俺達兄弟のこの学園での生活は前途多難であると思ってしまった。

「ちょっと、よろしくて?」 「へ(うん)?」

二時間目の休み時間、俺は一兄に一応自分のわかる範囲内で教えていたら、いきなり声をかけられ素っ頓狂な声を出した。

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有のブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺達を見ている。

わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだった。

俺は最初に見て、この女子は俺が一番嫌いなタイプの相手だとすぐ

にわかった。

今の時代女性は『偉い』と言えるくらいの構図になっているので、男は完全に『奴隷、もしくは労働力』と考えている女子も少なからずおり、そのため町中ですれ違っただけの女性に男性がパシリにされているなんて事は珍しくない。

実際はISを使える女性が『偉い』のだが、ISも使えないのに自分も『偉い』と思い込んでいる女性が多くいて、小中学校時代の喧嘩もこのようなタイプの女子の男子に対する横暴関係が原因で8割くらいは起こした。

まあ、どんな理由でも女子に対しての暴行はしてはいないが、その女子を庇った男子にはそれなりの制裁を加えておき、命令していた女子に至っては思いっきり睨み付けるだけにしておいた。

その結果女子生徒は俺を恐れて喧嘩どころか男子生徒に対しての扱ってもパシリなど無かったが、俺の起こした事件などで一兄に恋心を懐いていた女子もいたのだが、超鈍感の一兄に気付いて貰えず、その度にその女子生徒の心のケアに物凄いくらい時間がかかって苦労させられたのをよく覚えている。

と、これ以上昔の事を思い出すと余計に腹だ立つのでここまで置いておくが、IS学園は多国籍の生徒を受け入れなくてはいけないという義務のせいで、外国人の女子なんて珍しくもない。むしろ、クラスメートの半分がかろうじて日本人というだけだ。

「訊いていますか？お返事は？」

「あ、ああ。訊いているけど……どういう用件だ？」 「ご用件は何でしょうか？」

俺達がそう答えると目の前の女子はかなりわざとらしく声を上げた。一兄も俺もこの手合いは一番好かないのだ。ISを使えばそれが国家の防衛力になる。その結果ISを使える女性は偉いのだが、だからといって、その力を振りかざすのは違うと思っっている。力が粗暴なら、そんなものはただの暴力でしかないからだ。

一兄も俺も、千冬姉と『俺の尊敬する人達』いう存在から力を持つ者の『意味』を教えられている。だからこそ、俺は自分の持つ『スキル』を『暴力』では無い方向に持つていけるようにもできているのだ。だからこそこの手合いは好かないのだ。

「悪いな。俺、君の名前知らないし」 「俺も同じで、名前を知りません」

それと実際に目の前の女子生徒の名前なんて知らない。実際は自己紹介で言われたかもしれないが、俺達の姉である千冬姉がこの学園で教師をしていたと言う事と、しかも俺達の担任であったと言う事実の方が何百倍にもショックキングだったので、覚えているわけ無い。

しかしどうも俺達の答えが目の前の女子（いい加減名前を言ってくれるほうが助かる）にとってはかなり気に入らないものだったらしい。

吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

セシリアという名前なのか。覚えたが、滅多な事が無い限り話しかけたくないな。挨拶とかは別だがな。

「あ、質問いいか」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろし
てよ」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。と周りで聞き耳を立てていた女子がずっこけた。そして
俺もこけかけた。俺でも分かるのに、なんで一兄は解らないんだよ
！？

それを聞いたセシリアにいたっては物凄い剣幕になり、マンガであ
ったら血管マークが三つくらいあるだろう。

しかし一兄の方が凄い。何しろ普通に『知らん』とセシリアに応え
たのだから、ある意味凄いとも言える。それを聞いたセシリアは怒
りが一周して冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指
で押さえながらぶつぶつ言っている。
仕方ないので、俺が助け舟を出した。

「一兄、IS関係の事を今まで知らなかった俺でも単語で解る問題
だぞ。セシリアさんは国家のIS操縦者代表に選ばれるかもしれないな
い人材。その候補生ともなれば将来の国家防衛力ともなるべきエリ
ートだよ」

「そう言われてみればそうだな」 「そう！エリートなのです
わ！」

回復したよこいつ。どうせ言えることは解りきってるけどね。

「つまりあれか、代表候補生でもある自分が同じクラスにいる事に

でも感謝しろってやつか」

「その通りですわ。お二人ともISについて何も知らないのによくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っただけで、期待はずれですわね」

「俺達に何かを期待されても困るんだがな」

「ふん。まあでも？私は優秀ですから、あなた達のような人間にも優しくして「結構だ。解らなければ織斑先生に聞く」何ですって！？」

「忘れたのか？織斑先生は解らない者には解るまで教えると言った。教師と代表候補生とはいえこの学園の生徒であるあなたとは教えにくる内容を理解させるためのやり方が違う。それくらいあなたも解るだろ」

「そ、それはそうかもしれませんが、わたくしは入試で唯一試験管を倒したエリート中のエリートですわよ」

唯一、をものすごく強調された。　　って、ん。確かそれだと……。

「入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつか？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「それだと俺達二人とも倒してるぞ？教官」　　「は……？」

「ああ、確かにそうだが、あれって倒したっていえるのか？」　　「

運で勝つたみたいなものだな、あれ」

「そ、それはどうゆういみですか」

俺達の場合いきなり突っ込んできたからかわしたら、勝手に壁に激突してそのまま動かなくなったと言うもので、結果的に勝ったと言えるものなのが微妙なものなのだ。

そしてセシリアに応えようと思ったたらチャイムが鳴りこの時間は終了となった。

席に着く前にセシリアが『また後で来ますわ』と言って帰っていったのだが、面倒な事になったと思ってしまった。

第四話 怒りの鉄拳制裁と、今の世界で生きているくそ女登場（後書き）

初期のセシリアの登場です。この性格がのちのデレキャラに変わる第一号なのですが、難しいです。

それと実は現在作者は物凄く大変なめになっています。それは……

主人公の使うオリジナルISが考えられないのです。

初期の設定のとおりファイバードに使用かと思いましたが、最近面白いことを考えて止めたのですが、そのため主人公のISの設定が未だに決まらないのです。

単一能力に武装等など、考えることがいっぱいです。

名前は考えて出来たのですが、それ以外は何も決まっていません、どうしよう？

第5話 決闘の準備 クラス代表決定の準備

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目では最初からこのクラスの担任である千冬姉が教壇に立っている。

よっぽど重要なことなのか副担任である山田先生までノートを手を持って持っている。

俺もこの授業は専門的用語が余り出て来ないうえに、所持している『スキル』との関係上装備する物品の特性を良く知っておくのは良い事なので、ノートの準備をしつかりとしている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したかのように千冬姉が言う。目の前にいる一兄は分っていないだろうが、こちらは

出てきた単語で少しはであるが予想が出来た。もしも俺が選ばれるような事態になったら、一兄を生贄に捧げておこう。

そして俺は一兄の補佐にでもなれば少しかもしれないが楽は出来るしな。それともう一つは私的な復讐ではあるが、一兄には少しは俺のしてきた苦勞を少しでも分かってほしいものだしね。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。」

今の時点ではたいした差は無いが、競争は向上心を生む。
一度決まると一年間更新は無いからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

一兄は内容のほとんどを分っていないだろうが、クラス代表者に選ばれる可能性が高いのは俺達二人だという事に全然気付いていない。

俺達はTVや雑誌で有名になり、しかもこのクラスの担任の織斑千冬の『弟』というプロフィールがあるので、このクラスの大半の女子の思考は『織斑君ならきつとやってくれる』という思いが出来るので、どちらにしろ一兄か俺が選ばれるのだ。まああのうっとうしい女は別だろうが……。

そうすると予想通りに俺達の名前を周りの女子が推薦して来た。

「では候補者は織斑一夏と織斑秋夜の二名で……他にはいないか？
自薦他薦は問わないぞ」

そう千冬姉が言うつとやつと一兄も分かったらしく席を立てて周りの視線にやつと気付いたらしい。

「織斑兄。席に着け、邪魔だ。さて他にいないのか？いないならどちらかになるぞ」

「ちょ、だ、だったら俺は『弟である僕は兄である一夏を推薦します』って、秋夜！」

「何怒つての一兄。あんなあだ名を持つ俺がクラス代表になるわけないだろ。その代わり一兄をサポートしてやるから」

「そんなので安心できるか！それに『うるさいぞ織斑兄。他薦された者が文句を言うな。選ばれたのだから覚悟をしておけ』そ、そんな」

一兄が文句を言おうとしたら千冬姉がそれを遮った。選ばれたもう一人である俺が代表を蹴ったのだから結果的にこうなるのだ。だがしかしそれに文句を付けてきた人物がいた。

「待つてください！納得いきませんわ！」

パンツと机を叩いて立ち上がったのはあのセシリア・オルコットだ。それとだが俺自身彼女の言う事も予想できている。

彼女は俺達に『自分は代表候補生』と言っていたので、クラス代表には自分なるべきみたいなものであろうと思ったのだが違った。

「そのような選出は認められませんわ！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

その発言を聞いてあれッ？と思った。この言い方だと俺の予想は少しは当たっているのだが……

「（なあ今のセシリアさんの発言おかしくないか？）」 《 《 《 《
そうです（の）（わね）（ね）（？） 《 《 《 《

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

《(ちょっと、何ですのあの言い方!)》 《(さすがにムカつきましたの)》 《(あんなこと言うなんて酷すぎます!)》

「(同感だな。さすがの俺もムカつくぞ。それにしてもこいつ本当に国家代表候補生か疑わしくなってきたな)」

流石の俺達もセシリアの発言には驚き、ただ本人がクラス代表になりたいだけでここまで言われるのは、俺ですら予想できなかったからだ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

ブチッ。カチン。

「イギリスだって対してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「そんなにここにいるのが嫌ならI Sの国家代表を辞める。それから国に帰って幾らでもいいやがれ」

「なっ……!？」

俺達兄弟はさすがに切れたので思っていた事をつい、言ってしまった。一兄はしまったと言う感じだが、俺はそうではない。

ここまで言われてこの女を許す気にもならない。今この場で『スキル』を発動させてこの女を殴ろうかと内心考えている。

だが私情なうえに、この学園内で『スキル』をしようしたらどうな

るか分かってるし、千冬姉に止められてしまう可能性が高いし、そしてこんな下らない事とで使ってしまうえば『あの世界にいたあいつ等』と同じになってしまうので何とか抑えている。それでも俺の中にいる三人も同様に相当切れている。

「あつ、あつ、あなた達ねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのはあんだ。そんな口利いてよく国家代表候補生だとほざくな」

「何ですって、こうなったら決闘ですわ！」

パンツと机を叩くセシリア。だがそれ以上に俺の気が治まらない。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりも分かりやすい」「同感。思いつきりその場でやれるね」

「言ってくれますわね。負けたらわたくしの小間使い　いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「上等ですわ。あなた達二人はこのわたくしがどれほどのものか教えて差し上げますわ!!」

周りからは止めた方がいい等色々言われているが、そんな事関係ない。

逆に一兄が『ハンデ』はいるかと言ったのだが、昔であるならともかく、ISが出てからの世界情勢を考えれば愚者の一言に近かったので、周りから色々言われたので、俺が助け舟を出した。

「なら、俺と一兄のタッグとあんた一人の変則戦でいいか？俺と一兄の最大IS稼働時間は二人合わせて精々30〜40分程度だ。俺達二人であんたと戦う。代表候補生に選ばれたあんたならこの位ハングでも何でもないだろ。おまけにこの下らん決定の時間も短縮できるからな」

「クラス長の決定が下らない事ですか？いいですわ。それなりのハングがあつて私の実力がわかると言うもの。その変則戦お受けいたしますわ」

「さて、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑兄弟とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

そう言つて千冬姉の声でこの事案は終了となり、そして授業が再開された。

本当ならここで少しではあるが落ち着きを取り戻したシャインを表に出して、あのくそ女に祖国の侮辱を取り消さそうと思つたのだが、シャインとは言え出すと後々面倒事になりかねないので、今回は保留してもらつた。

それはそうとだが、俺自身どうしようか実際は迷っている。

実際問題この決闘で『スキル』を使用すれば、一兄が試験で使用したISでも、余裕であのくそ女を倒す事はできる。

だが問題はスキルの持つ『威力』と相手の持つているISの性能と武装なのだ。

試験で使用したISなら簡単に終わらせることができるが、相手は専用機という国もしくはは企業から提供されたISを使用してくるに

違いないのだが、使用してくるISの性能と武装によってはこちらが一時的な不利にはなるかも知れないが、結果は勝つ事はできる。だが、もしも相手のISの装甲が試験で使用したものよりも弱かったら、相手を殺してしまう可能性もあるのだ。

そう、それは俺が初めて『スキル』を使用し、そして使用したスキルにあつた特殊システムによつて発動してしまった『暴走』で、自分の姉である千冬姉を『殺しかけた』あの時と違い、本当に相手の息の根を止めてしまう可能性があるのだから……。

第六話 部屋割りと訓練。そしてやっていること（前書き）

いろいろと難しかったです。

それと現在台風が来ているのですが、読者の皆さんは大丈夫ですか？

では本編をどうぞ

第六話 部屋割りと訓練。そしてやっていること

今日一日の授業が終わったの放課後、俺は一兄と一緒に山田先生による特別授業を受けていた。

正確には受けていたのは一兄だけで、俺はISをより理解するためにこの特別授業に参加している。

そして特別授業が終わったのだが、一兄は机にぶつ倒れたが、俺はさらに一兄にISの『兵器としての面』をわからす為にさつき教えてもらった内容を使ってわかる様に教えた。

ISに関して言えば俺も一兄も初心者以下だが、それでも知識と戦闘に関することに関しては『スキル』と『あの世界での戦闘経験』が物言える俺は、この駄目な兄にしつこく教えておいた。

あたりは夕暮れになったが、俺達は未だに教室でこの特別授業をやっていたら、山田先生が急にやって来た。不思議に思ったのだが、山田先生から俺達二人を急遽このIS学園内の生活寮に入れることとなったらしい。

当初俺達は一週間は自宅からの通勤だったのだが、ISを動かせる『男子』ということで、政府が急がせたらしい。

ちなみにだが、俺達の荷物はその後に来た千冬姉により、着替えと入浴用具、携帯電話の充電器を除いた荷物を持ってきてくれたらしい。

「それとだが秋夜、お前の『あれ』は私が預かっている。もし必要なら私に言え。私の部屋においてあるからな」

「いや、いいよ。『あれ』を家に置くよりもいいし、見に行くだけにするよ。たまにね」「ふ、そうか」

そう言っただけ俺達は渡された力ギを持って今後俺達の生活する寮の部屋に向かっただけだ。

実はIS学園は全寮制なのだ。

理由は簡単で、IS操縦者は未来の国家防衛を担う存在でもあるので、そのため国・軍・企業等からすれば、優れた人材を手に入れることは、未来においての国家防衛や様々な面で有利になるので重要視されるのだ。

さらにISの数は世界でたったの『467機』しか存在しないのも拍車をかけているのだ。

なぜ467機しか無いのかと言うと、ISに使用されている『コア』の数が原因なのだ。

しかもこのコアに至ってはISの製作者である『篠ノ之 東博士』しかコアを造れないと言えるほどのブラックボックスの塊で、結果的にこの何とも言えない数しかISは存在していないのだ。

そのためこのIS学園にも練習機として何機かが存在し、そしてあのうっとうしい女であるセシリアの様な『代表候補生』には、専用機といわれる『その人だけの特別な機体』を持つ事もできるのだが、専用機はほんの一握りの人間にしか授与されないのです、持っている人間は軍・企業の関連でなければ持つ事もできず、そして専用機を得るには相当な努力等が必要なのだ。

これらの内容は今日の山田先生の特別授業ではなく、俺が勉強して調べたことであるが、それでも一週間後の決闘に勝てるかとなれば相当難しいので、どうしようかと迷っていた。

そして俺と一兄はそれぞれの部屋の番号の書かれた鍵の番号と、部屋の番号を確認し、俺は一兄と別れた。ちなみに部屋の番号は一兄が『1025』で、俺のは『1030』である。

多分、急いでσειで一兄と一緒に部屋になれないのは残念でもあるが、それも多分数週間か一ヶ月かそこらの辛抱だろう。

その後俺は同室となった布のほとけ 本音ほんねと話をする事となったのだが、同じクラスの子と知ってびっくりした。

「え、アッキーさ、私も自己紹介したんだよ」

「アッキーって、ごめん。俺自身家族がまさかここで仕事してるとは思わなくて、そっちの方がびっくりして他の自己紹介聞いていなかったんだ。まあ少しの間だけだと思っけど、よろしくね、本音さん」

「むう、まあいいか。これからよろしくね」

何かこの子独特の感じで話す子だなあと思ったが口には出さず、その後クス八が『のほんとした人ですね』と言ったので、彼女に許可をもらって『のほんさん』と呼ぶ事にしたのだが、その後俺達は部屋にあるシャワーの使用時間等を決め、食事に向かった。

ちなみにだが、一兄の同室の人間はほう姉で、入って早々何かやらかしらたらしく、部屋の前に多数の女の子が列をつくっていた。

俺がなぜほう姉かと思ったかと言うと、簡単に一兄が部屋の前のドアの前で話していたのを聞いただけであるが、家でもやったようなラッキースケベ的な何かをしたのだろうと考え込んだ。

翌日の朝と言ってもまだ午前4時30であるが、俺は同室ののほほんさんを起こさないようにしながら、服装を寝巻きからジャージに着替え、軽いランニングと自身の訓練に出向いていった。

訓練というが、実際は俺自身の心を鍛えるものである。俺の持つ『スキル』が暴走して千冬姉を殺しかけ、そしてあの世界での出来事があり、俺は向こうの世界で『ある拳法』を習った。

ちなみにだがこの拳法はこの世界であるのかと思って調べたら無かった。

『二度とあんな思いをしたくない』

そう思う俺の心に拳法を教えてくれた師や、師と同じ存在である9人に、そしてさまざまな事を教えてくれた人達が、向こうでいた時、俺に力を与えてくれた。

その結果俺はこの世界に帰って来て最初に千冬姉の鉄拳制裁と一兄の拳骨だけ受けたが、その後は『家族』として迎えてくれた。

その後俺は向こうにいる間におきた事件を全て話し、そして俺は心も身体も強くなれたと思った。

そして同時にあの世界で会った人達全てに感謝している。今の自分というものをつくってくれた人達に……。

その後俺はこっちに帰って来てから身体を鍛え始めた。心も一緒に鍛えるために。

ランニングはこの学校のグラウンドは5キロはあるので、結構ランニングには最適である。

軽くグラウンドを3周した後、俺は向こうの世界で教わった『ある拳法』の基本である『正拳突き』と、その拳法にある型を俺が覚えている限りでやったりしながら、時間を少し潰していた。

「せいがでますね」 「何かあったのか？」

俺は後ろを見ずに話しかけてきた存在に声を出した。たとえ後ろを振り向いたとしてもそこには『何も』いないのだ。

正式には『何も無い』と見えるようにその存在の持つ能力で隠れているだけなのだ……。

「いえ、今のところは何も」 「そうか。けれど俺達二人はこの世界で結構『危険だからな』」
「わかっています」

危険、それは俺達兄弟は本来なら『女性』しか扱えないISを動かせることが起因している。

過去に俺と一兄は、当時の『ブリュンヒルデ』・『世界最強のIS操縦者』である、現状でも世界最強の名を持つ俺達の姉『織斑千冬』の弟達という事で、『第二回モンド・グロツソ』の時のように誘拐と言う事態になったように、今は『IS』を動かせると言うこと事

態で結構危うい場所にいるのだ。

もしも俺達以外の男性が『IS』を動かせるようになったら、この世界のバランスは一気に崩れてゆく。

何しろ現状最強の国家防衛能力を持つ『IS』は今まで、『女性』にしか反応しなかった。

もしもである、『IS』が登場する以前から『あらゆる場所に女性に対して絶対の力を持つ組織・団体』があつたらどうなるであろうか？

『男性』よりも『女性』が優遇される今の時代、どれほどの『男性』が『女性』に対してのさまざまな恨みがあるであろうか？

そして自身が『IS』を使えなくても『男性を奴隷のように扱う女性』がいるこの世界は、どうなるであろうか？

それは俺の考えているこの世界での最悪なものになる『IF』かも知れない。

だがしかし、もしも今のこの世界が持っている『女性の特権』が消えた瞬間、この世界はどうなるのであろうか？

それが俺達二人の兄弟の出現によってこの状況は加速していると言つても過言ではない。

だから俺は自分のスキルの中にある『諜報関係』の存在を、俺達二人が『IS』を起動させたあの瞬間から、出しているのだ。

今俺と話している存在はその中の一体であり、そして常時このように『自身の姿を周りと一体化させる』能力を持つ彼が、俺との連絡手段となっているのだ。

「今のところ確認できる組織・団体に不穏な動きはありません。ですが、貴方が感じている危険はこの学園にいる限りではないのでは？」

「いや、そうも言えないな。何しろISの生みの親のあの人は結構『愉快犯』的な性格をしている。だから多分だがそのうち……」

「そのうち、何かを仕掛けてくると？」 「可能性は0じゃない以上、気をつけておいてくれ」 「わかりました。何かあり次第連絡します」

そう言っただけ彼の気配は遠のいて行った。そして俺は軽く息をつき、起きた時よりも少し明るくなった空を見上げた。

「まったくこっちもこっちで大変なのに、『何かあるかもしれない』っていう可能性も考えなきゃいけない。まったくもって面倒だな」

そして俺は時間的にもういいと思い、部屋に帰って行った。早くしないと部屋にいる相方の子にシャワーシーンを見られて『きゃー！』何ていう馬鹿兄貴と同じようなラッキースケベ的な展開は俺も受けたくないからだ。

第六話 部屋割りと訓練。そしてやっていること（後書き）

のほん
本音さん登場です。口調ってこれで合っているか不安です。

完璧にいつて主人公ですが『響鬼』のトレーニングのような感じでやっています。

ただし『響鬼』よりかは幾分か優しいメニューでやっていますが。

主人公の専用ISはいまだに考え中ですが、基本的な攻撃パターンは決まっています。攻撃パターンだけは皆さんも予想がわかるかも知れませんか。

第七話 決闘準備と当日になっても来ない物（前書き）

結構時間がかかりましたが、まだ決闘はしません。
一応決闘までの準備期間等になっています。

第七話 決闘準備と当日になっても来ない物

部屋に帰った俺は何とか同室ののほほんさんに『ラッキースケベ』的な事無く帰り、その後一緒に食堂に向かった。

だが、俺達よりもどうやら一兄達のほうが早く来ていたらしく、一緒に並んで食事をすることにした。

ちなみに一兄も俺と同じでのほほんさんのことは知らなかったらしく、そのてんを誤った後、ほう姉と

一緒に食事になったのだが、相当ほう姉の機嫌が悪いのが目に見えるほどの怒りようだった。

その後俺と一兄とほう姉とのほほんさん以外にも、俺達と交流を深めようとした人 came たりしたが、結構飯の量が俺達兄弟二人よりも少なく不思議に思ったが、お菓子とかが原因らしい。

ちなみに食べた物は俺と一兄とほう姉とのほほんさんは和食セットで、後に来た子はパン一個に飲み物一つ、そしておかずの皿が一つだけだったのだが、俺や一兄からすれば後々後悔するだろうなと思うものだったりした。

その後ほう姉とのほほんさん達が先に食べ終わって退出したが、俺と一兄はまだ残っていたのだが、千冬姉が食堂に来て皆を急かさせて終わらした。何しろ遅刻したらグラウンド10周させると言われたらキツイからだ。

その後授業に参加した俺達は授業を受けたのだが、一兄以外のこのクラスの生徒は黙々と授業内容を消化していった。

俺は一兄の特別補習で多少解らない部分を聞いたりする程度なのだが、一兄は始めからなので結構山田先生に悪いかと思ってもいる

のだ。

だが、三時間目の授業前に千冬姉から驚くべく発言がなされて、まだISに関して様々なことを分かっている一兄以外が啞然とした。

「ところで織斑兄弟、お前達のISだが準備に時間がかかる」

「へ？（はい？）」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」「？？？（・・・）」

一兄は意味が分からないので不思議がつていたが、俺は勉強している
ので意味が分かり目を大きく見開いて驚いた。

周りからも凄いくらい声が上がったのだが、まったく意味の分からない一兄と事態が理解できる俺とを見て、千冬姉が教科書の6ページ
の部分を一兄に音読させて意味を分からせた。

「言い方変えたら俺達兄弟はモルモットってところだね。一兄もそこ
んところ理解してる？」 「へ？ そうなのか？」

「あのね、僕達は今まで女性しか動かせなかったISを、偶然とは
いえ初めてISを動かせる『男性』なんだよ？一応専用機っている
けれど、実際はただのデータ採取目的の機体なんだよ。そこんとこ
ろと自分がここにいる理由をしっかりと考え直せよな一兄」

その後製作者である『篠ノ乃束』の名前が出たので、同じ『篠ノ乃
の名前を持つほう姉が、妹という事を千冬姉がばらし、勝手に皆の
期待とかがだが、ほう姉は大声を出して否定した。

ほう姉からすれば、姉であるあの人のせいで一兄と離れ離れになり、

家族すらまともにはいられないという状況をつくりだしたあの人には嫌いな面が多いだろうと思った。そんな雰囲気の中、千冬姉の号令で授業が始まった。

その後授業が終了してすぐにセシリアがやってきた。俺は言う内容がわかっていたので、平然としていられた。

おまけにだがこの二人は漫才かと思うことを普通にしていたのだが、一兄の知識の無さには少し危機感を感じてきたので、その内教えとこう。

そしてセシリアが退出した後昼飯を食べようと出かけようとしたのだが、ほう姉はさっき会った事案が原因で、みんなと距離が置かれていた。

というよりも、ほう姉から『近づくな』という雰囲気の気配がただ漏れなのだから、仕方が無いのであるが、このほう姉の雰囲気を壊せる人間がこの場にいるので、お願いしておいた。

俺の場合は、昔からこの手の雰囲気壊すことは出来ないからだ。

「一兄、先に行って席取っとくから後、お願いね」 「任せるよ、お前もちゃんと席取っとけよ」

「了解。じゃ食堂で」 「ああ」

俺はそういつて一兄を教室に残して俺は先に食堂に向かった。数分後、一兄はほう姉を連れてやって来た。

ちなみに俺はもう席を取っているのだから来るのを待っているだけでよかったので結構楽だったりする。

「お疲れさん、さっさと飯にしようか」 「そうだな、いいよな筈」

「あ、ああ」

その後俺と一兄はほう姉からISに関してのを知るために見てほしいと一兄が頼んだので、放課後道場に行つて昔やっていた剣道をする羽目になつたのだが……。

結果は惨敗もいい所だった。一兄も俺も何しろ『剣』を握るのも何年ぶり、俺に関しては剣よりも『拳』よりになつていたので、ほう姉の攻撃を回避するのが精一杯で、一兄はボコボコにされた。

その結果一兄はほう姉から放課後三時間の特訓を言いわたされたのだが、俺がそこに介入してIS方面の運用方法の授業も入れたいので二時間にしてもらった。

どちらにしろ一兄には少々かもしれないが地獄を見てもらうことには変わりはないのだ。

ちなみに追加として俺達の担任の先生であり、俺達兄弟の姉である千冬姉にも協力してもらい、俺達に20分だけであるが、稽古をつけてもらう事を頼んだので、一兄は『剣』を主体とし、俺は『拳』を主体として千冬姉相手にすることになつたが、ある意味有意義な時間をすごしたのだ。

このおかげで俺としても『あの時』の状況に近いぐらいの状況と思つたぐらい死ぬかと思つた。

だが、一週間後の決闘当日になつたのだが……。

「何時になつたら俺達の専用機が来るんだろうね？」 「そうだよ

な
」

俺達兄弟に与えられるはずの専用機が未だに搬入されていないのだ
った。

第七話 決闘準備と当日になっても来ない物（後書き）

今回はISバトルですが、戦闘方面は難しいので大丈夫かなと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699u/>

IS - インフィニットストラトス - 機人（きじん）の力を持つ者

2011年12月11日19時46分発行